

「これは、ただ事でない」  
とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は、別に烈しいという程のものではなかった。しかし、長いゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない無気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下した。村では、豊年を祝う宵祭の支度に心を取られて、さっきの地震には一向気がつかないもののようにである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸付けられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、見る見る海岸には、広い砂原や黒い岩底が現われて来た。

「大変だ。津波がやって来るに違いない」と、五兵衛は思った。このままにしておいたら、四百の命が、村もろ共一のみにやられてしまう。もう一刻も猶予は出来ない。

「よし」

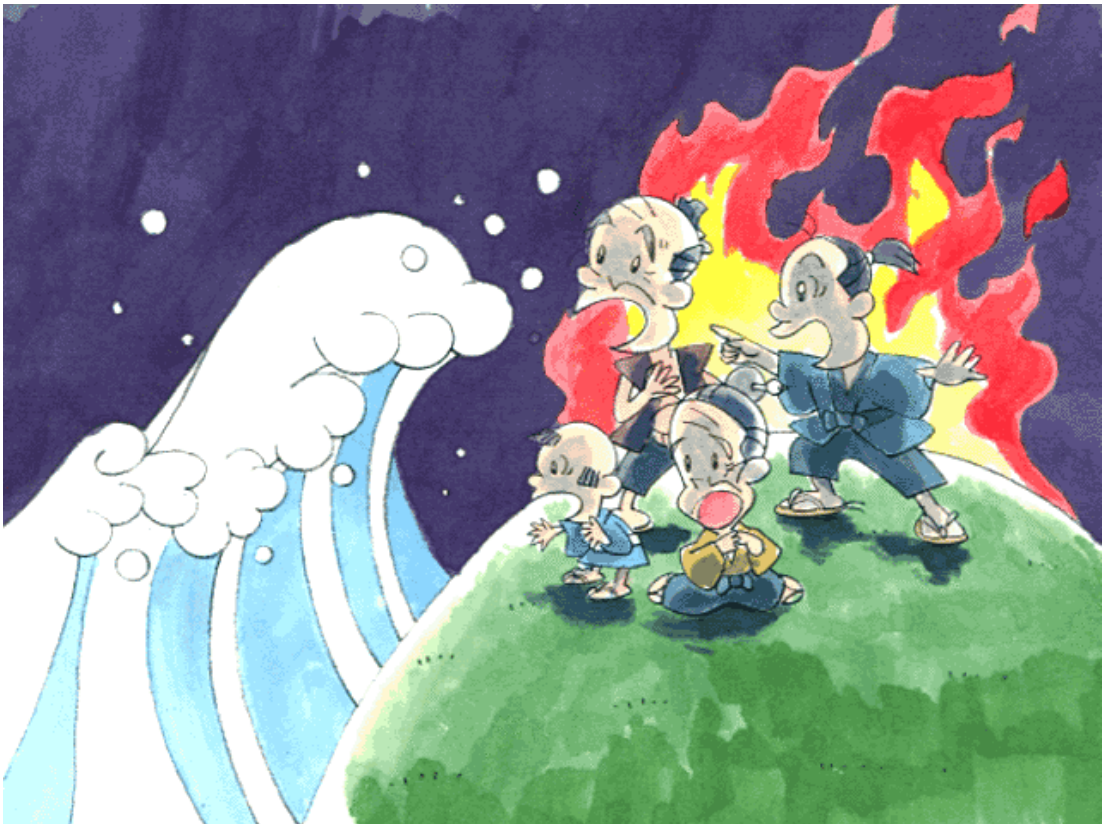
と叫んで、家に向け込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛出して来た。そこには、取り入れるばかりになっているたくさんの稲束が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救えるのだ」

と、五兵衛は、いきなりその稲むらの一つに火を移した。風にあおられて、火の手がぱつと上った。一つ又一つ、五兵衛は夢中で走った。こうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまうと、松明を捨てた。まるで失神したように、彼はそこに突立ったまま、沖の方を眺めていた。

日はすでに没して、あたりがだんだん薄暗くなって来た。稲むらの火は天をこがした。山寺では、この火を見て早鐘をつき出した。





「火事だ。莊屋さんの家だ」と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。続いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追うようにかけ出した。

高台から見下している五兵衛の目には、それが蟻の歩みのように、もどかしく思われた。やっと二十人程の若者が、かけ上って来た。彼等は、すぐ火を消しにかかろうとする。五兵衛は大声に言った。  
「うつつちゃっておけ。」

大変だ。村中の人に来てもらうんだ」

村中の人は、追々集まって来た。五兵衛は、後から後から上って来る老幼男女を一人一人数えた。集まって来た人々は、燃えている稲むらと五兵衛の顔とを、代る代る見くらべた。

その時、五兵衛はカーぱいの声で叫んだ。

「見る。やって来たぞ」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。その線は見る見る太くなった。広くなった。非常な速さで押し寄せて来た。

「津波だ」

と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のように目の前に迫ったと思つと、山がのしかかって来たような重さと、百雷の一時に落ちたようなとどろきとをもって、陸にぶつかった。人々は、我を忘れて後へ飛びのいた。雲のように山手へ突進して来た水煙の外は、一時何物も見えなかった。

人々は、自分等の村の上を荒れ狂って通る白い恐ろしい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退いた。

高台では、しばらく何の話し声もなかった。一同は、波にえぐり取られてあとかたもなくなった村を、ただあきれて見下していた。

稲むらの火は、風にあおられて又燃え上り、夕やみに包まれたあたりを明るくした。始めて我に返った村人は、この火によって救われたのだと気がつくくと、無言のまま五兵衛の前にひざまづいてしまった。